

国歌大観の 番号	本文	地名等考	
425	河風の寒き長谷を噴きつつ雪があるくに似る人も逢へや	榎井市初瀬付近ならびに同市の旧朝倉村地域など、初瀬川流域一帯の峡谷状の地「隠口の」の枕岡もこの地形による。伊勢におもむく通路に当たる。	
2353	長谷の斎観が下にわが隠せる妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも		
3310	(泊_の国)		
3311	隠口の泊_少国に妻しあれば石は履めどもなほし来にけり		
3312	(泊_小国)		
	(泊_道)		
2511	隠口の豊泊_道は常滑の恐き道そ恋ふらくはゆめ		
2261	泊_風かく吹く夜は何時までか衣片敷きわが独り寝む		
912	泊_女の造る木綿花み吉野の瀬の水沫に咲きにけらずや		
424	隠口の泊_少女が手に纏ける玉は乱れてありといはずやも		
991	石走り激ち流るる泊_川絶ゆることなくまたも来て見む	この地をゆく道またこの地への道	
1107	泊_川白木綿花に落ちたぎつ瀬を清けみと見に来しわれを		
1108	泊_川ながるる水脈の瀬を早み井堤越す波の音の清けく		
1382	泊_川流る水沫の絶えばこそわが思ふ心遠げじと思はめ		
1770	三_の神の帯ばせる泊_川水脈し絶えずはわれ忘れめや		
1775	泊_川夕渡り来て吾妹子が家の門にし近づきにけり		
2706	泊_川速み早瀬を擁ひ上げて飽かずや妹と問ひし君はも		
3226	さざれ波浮きて流るる泊_川寄るべき磯の無きがさぶしさ		
79	(泊_の川)		
3225	(#)		
3263	(#)		
3299	(#)		
3330	(#)		
282	(泊_山)	榎井市の旧上之郷村地域に発し、初瀬で吉尾よりの小流をあわせて西流し、三輪山の裾を巡って、西北流、末は佐保川をあわせて大和川となる川	
428	隠口の泊_の山の山の隙にいさよふ雲は妹にかもあらむ		
45	(泊_の山)		
420	(#)		
428	隠口の泊_の山の山の隙にいさよふ雲は妹にかもあらむ		
1270	隠口の泊_の山に照る月は盃戻しけり人の常無き		
1407	隠口の泊_の山に霞立ち纏引く雲は妹にかもあらむ		
1408	狂言か逆言か隠口の泊_の山に置せりといふ		
1593	隠口の泊_の山は色づきぬ時雨の雨は降りにつらしも		
2347	海小船泊_の山に降る雪の日長く恋ひし君が音そする		
3331	(泊_の山)	「はつせ」の地の山の総称、初瀬山（高さ、548m）をさすとは限らない。	
3806	事しあらば小泊_山の石城にも隠らば共にな思ひわが背		
1095	三請つく三輪山見れば隠口の泊_の検原思ほゆるかも		
1	泊_朝倉宮に天の下知らしめし天皇の代 大泊瀬稚武天皇 天皇の御製歌 籠もよみ籠もち 堀串もよみ堀串持ち この岳に菜摘ます児 家間かな 告らさね そらみつ 大和の国はお しなべて われこそ居れしきなべて われこそ座せ われにこそは告らめ 家をも名をも		
1664	(泊_朝倉宮)		
203	降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに		
1561	吉名張の猪養の山に伏す鹿の囁呼ぶ声聞くがともしさ		
2190	わが門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野の黄葉散るらし		
			この地に住む娘子
		「豊」は美称の接頭語	
		この地を吹く風	
		この地に住む娘子	
		榎井市の旧上之郷村地域に発し、初瀬で吉尾よりの小流をあわせて西流し、三輪山の裾を巡って、西北流、末は佐保川をあわせて大和川となる川	
		榎井市初瀬の地	

2207	やど あさぢ よなばり なつみ しぐれ わが屋戸の浅茅色づく吉隠の夏身の上に時雨降るらむ	桜井市吉隠の地
2339	よなばり 吉隠の野木に降りおほふ白雪のいちしろくしも恋ひむわれかも	
203	よなばり あかひ 降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに	桜井市吉隠の地の内で但馬皇女の墓所があつた岡であるがこんにち所在不明。
1561	よなばり あかひ つま 吉名張の猪養の山に伏す鹿の囁呼ぶ声を聞くがともしさ	「猪養の岡」に同じ
2190	かど あさぢ よなばり なみしば もみちち わが門の浅茅色づく吉隠の遺葉の野の黄葉散るらし	吉隠の地の中であろうがこんにち所在不明。
2207	やど あさぢ よなばり なつみ しぐれ わが屋戸の浅茅色づく吉隠の夏身の上に時雨降るらむ	吉隠の地の一地名であろうがこんにち所在不明。
3331	おさかやま (忍坂山)	桜井市忍坂の東北方の山(高さ292m)、北の見輪山に対して、南にあって初瀬の谷の入口をなす。
1511	おくら こよひ 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝にけらしも	多武峰の端山、倉橋上方の山、今井谷のあたり、忍坂山などの諸説がある。
1664	おくら い 夕されば小倉の山に臥す鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも	
1283	くらしがは いは そざかり いは 梯立の倉橋川の石の橋はも壮子時にわが渡りて石の橋はも	多武峰山中に発し、音羽山、多武峰の間の谷を北流し、倉橋を過ぎ、末は寺川となり、大和川に注ぐ川
1284	すげ あ すげ 梯立の倉橋川の川のしづ管わが刈りて笠にも縋まぬ川のしづ管	
1282	はしたて くらしやま は 梯立の倉橋山に立てる白雪見まく欲りわがするなべに立てる白雪	桜井市倉橋東南方の音羽山(高さ851m)をいうものであろうが、多武峰北方の山かとする説もある。
290	よ とも 倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光乏しき	「倉橋山」に同じ
1763	よごも く がた 倉橋の山を高みか夜隠りに出で来る月の片待ち難き	
1704	たそ たむ ふさ手折り多武の山霧しげみかも細川の瀬に波の騒げる	桜井市多武峰にある多武峰(高さ、619m) 桜井市の南辺、飛鳥の東方の高峰
589	うちみ こ 衣手を打廻る里にあるわれを知らにそ人は待てど来ずける	多武峰とする説もある。
239	かりぢ (獵路の地)	桜井市鹿路の地、多武峰東方の山地で、吉野上市への道に当たる。池の所在は不明
3089	かりぢ 遠つ人獵路の池に住む鳥の立ちても居ても君をしそ思ふ	
239	かりぢ おの (獵路の小野)	この地の山野
	とみ (跡見)	桜井市外山のあたりであろうか。吉隠を中心として西は外山から東は宇陀市榛原区に及ぶ一帯の地との説。吉隠北方の鳥見山の麓の地とする説などがある
723	とみ たどころ (跡見の庄)	
1560	(#)	「庄」は私有の田園で、ここは跡見の地の大伴氏所領のた田庄である
1549	いぬ とみ おかへ なたしこ ふさたを ならびと 射目立てて跡見の岳邊の瞿麥の花總手折りわれは行きなむ奈良人の為	「跡見」の地のどこかの岡
2346	うかむら とみやま いも 窺狙ふ跡見山雪のいちしろく恋ひば妹が名人知らむかも	「跡見」を外山とすれば、外山南方の鳥見山(高さ、244m)であろうか、吉隠北方の鳥見山(高さ、733m)とする説も有る。
990	しげかかむ 茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の樹の歳知らなく	「跡見」の地のどこかの丘の名であろう。「茂岡」を知名でないとする説も有る。
1560	いも みそめ 妹が目を始見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ	「跡見庄作歌」とあるから、奈良県の「跡見」付近の地であろうが、所在未詳
282	いわれ ほつせやまいつ よふ つのはふ磐余も過ぎず泊瀬山何時かも越えむ夜は更けにつつ	香久山の東北のあたりから、桜井市桜井にかけての一帯の地であろう。
3324	いはれ (石村)	
416	かも がく ももづたふ磐余の池に鳴く鶉を今日のみ見てや雲隠りなむ	香久山の東北、桜井市の西南の地に広がっていた池か
3325	いわれ しろうへ つのはふ石村の山に白袴に懸れる雲はわが大君かも	桜井市谷の西南方の丘陵であろう。神名帳の磐余山口神社が大字谷にある。
423	いはれのみち (石村之道)	磐余の地を通る道
3276	(山田の道)	蘇我倉山田石川麻呂が最後をとげた山田寺の寺址のある地であろう。飛鳥方面より東北に向かって山田、阿部～桜井、三輪に向かう古道
1706	たかや ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手の高屋の上に櫛引くまでに	飛鳥の東方山地、多武峰山塊中腹の桜井市高家か
1787	しきしま (磯城島)	
3248	(#)	
3249	しきしま やまと 磯城島の日本の國に人二人ありとし思はば何か嘆かむ	
3254	しきしま やまと ことたま さき 磯城島の日本の國は言霊の幸はふ國ぞま幸くありこそ	大和の枕詞、三輪山の南方、桜井市の金屋付近、長谷の谷の入口をなす一帯の地である。金屋の付近に崇神天皇の磯城瑞籬宮、欽明天皇の磯城島金刺宮があった。
3326		
4280	た わか いま しきしま われ いは 立ち別れ君が往さば磯城島の人を吾じく齋ひて待たむ	
4466	しきしま おを 磯城島の大和の國に明らけき名に負ふ伴の結心つとめよ	
2951	つばいち やそ ちまた なら 海石檀市の八十の衝に立ち平し結び紐を解かまく惜しも	桜井市金屋付近にあった古代の市、地は三輪山の西南麓、初瀬谷の北側の入口にあたり、古代において山辺道、初瀬道、山田道、磐余の道、その他忍阪よりくる道、大和の平坦地よりくる道など相会した四通八達のところ、市道には椿が植えられていたようである。往古歌垣の風習の行われたところ、こんにち椿観音という小祠を村内にのこしている。
3101	さ つばいち やそ ちまた こたれ 紫は灰指すものぞ海石檀市の八十の衝に逢へる見や誰	

	(三輪)	桜井市三輪一帯の地、東方に三輪山があり、山麓に、山を身体として大物主神をまつる大神神社がある。
712	うまさけ みわ ぼふり たふ 味酒を三輪の祝がいはふ杉手触れし罪か君に逢ひがたき	
1517	うまさけ ぼふり もみち 味酒三輪の祝の山照らす秋の黄葉の散らまく惜しも	この社の神官をいう。
1770	みわがは (三輪川)	
2222	(#)	初瀬川が三輪山の南裾を東から西へめぐるあたりをいう。
18	三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや	
19	へそがたの林のさきの狭野標の衣に着くなす目につくわが背	円錐形の端麗な山（高さ、767m）初瀬の谷の北側の入口をなしてあり、山中に磐境のあと多く、往古から信仰の山。記紀の三輪山伝説に名高く。南麓には、往古、海石榎市があり、西麓を山辺道が北へ走っていた。
1095	みもろ みわやま こもりく ほつせ 三諸つく三輪山見れば隠口の泊の松原思ほゆるかも	
1684	春山は散り過くれども三輪山はいまだ含めり君待ちかてに	
17	みわ (三輪の山)	
156	みもろ かむびすいめ 三諸の神の神杉夢にだに見むとすれども寝ねぬ夜ぞ多き	
1093	みもろ やまなみ まきむくやま つぎ 三諸のその山並に子らが手を巻向山は継のよろしも	
1094	ころも そ うまさけみむろ もみち 我が衣色どり染めむ味酒三室の山は黄葉しにけり	
1770	みもろ ほつせがはみを 三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずはわれ忘れめや	
2512	うまさけ みもろ ほ おとす 味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音ぞ為る	「みもろ」は神の居所、神座をいう語で「みむろ」とあるのも同じである。
3222	みもろ (三諸)	
2472	みもろ いはほすげ かたもひ 見渡しの三室の山の巖管ねもころわれは片思そする	
94	玉くしげみむろの山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ	
1377	ゆふか みもろ かむ いつ 木綿懸けて祭る三諸の神さびて齋くにはあらず人目多みこそ	
2472	みもろ いはほすげ かたもひ 見渡しの三室の山の巖管ねもころわれは片思そする	各地にあり得るわけであるが、ほとんど奈良県のもので、三輪山をさすとおもわれるもの。
2512	うまさけ みもろ ほ おとす 味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音ぞ為る	
94	玉くしげみむろの山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ	
1094	ころも そ うまさけみむろ もみち 我が衣色どり染めむ味酒三室の山は黄葉しにけり	各地にあり得るわけであるが、ほとんど奈良県のもので、三輪山をさすとおもわれるもの。
2472	みもろ いはほすげ かたもひ 見渡しの三室の山の巖管ねもころわれは片思そする	
324	みもろ かむなびやま (三諸の神名備山)	
1761	(#)	「みもろ」「みむろ」および「かむなび」参照
3268	(#)	
1240	みもろとやま いにほも 玉くしげ見諸戸山を行きしかば面白くして古思ほゆ	
157	やまべま そゆふみじ脚ふ ゆき 三輪山の山辺真麻木綿短木綿かくのみ故に長しと思ひき	「みむろの山」「みもろの山」と同じであろう。
3014	みわやま とよ みを た 三輪山の山下響み行く川の水脈し絶えずは後もわが妻	
94	玉くしげみむろの山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ	神をまつる山、ここでは三輪山をさすと見られる。
2360	をとめごすも かよ こ 人の親の少女児裾系て浅る山辺から朝な朝な通ひし君が来ねばかなしも	地名として、三輪山とする説あり。
3222	もやま (守る山)	
1092	まきむく ひはら 鳴る神の音のみ聞きし巻向の松原の山を今日見つるかも	巻向の嶺にひろがっていた松原をいうのであろう
1118	ごと ひはら かざし いにしへにありけむ人もわが如か三輪の松原に神頭折りけむ	三輪山の西北、倭笠織村伝承地となっている松原と称する丘陵地に擬せられているが、松原の林相は、巻向にまでわたってひろくひろがっていたようである。
1119	ゆ たを 往く川の過ぎにし人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の松原は	
1100	まきむく あなし ゆ 巻向の痛足の川ゆ往く水の絶ゆること無くまたかへり見む	桜井市穴師を中心とした一帯の地で、三輪の北方につづくところ。垂仁天皇の纏向珠城宮、景行天皇の纏向日代宮がこの地にあったといわれる。
3126	まきむく あなし こ 纏向の痛足の山に雲層つつ雨は降れども濡れつつそ来し	
1093	みもろ やまなみ まきむくやま つぎ 三諸のその山並に子らが手を巻向山は継のよろしも	
1268	まきむくやま ま 見らが手を巻向山は常にあれど過ぎにし人に行き纏かめやも	巻向の東方の山で、いま三輪山の東北につづく山を巻向山（高さ、567m）と称している。現巻向山とは小沢をへだてて、穴師の里に近い方の山。穴師山をもこめて巻向山と称したものであろうか
1815	まきむくやま こ 子らが手を巻向山に暮されば木の葉しのぎて霞たなびく	
1269	まきむく やまべ みなわ 巻向の山辺とよみて行く水の水珠のごとし世の人われは	「巻向山」に同じ。

1087	あなしがは まきむく ゆつき たけ くもあ 痛足川波立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲層立てるらし	
1088	あしひきの山川の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る	現巻向山には山頂が二つ（西面の頂は565m）あるが、そのいずれかの峰であろう。
1816	ゆふ さつひと ゆつき たけ 玉かざる夕さり来れば狐人の弓月が嶽に霞たなびく	
1101	よる く まきむく かほと と ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しも嵐かも疾き	現巻向山と穴師山との小溪および三輪山との小溪からくる小流をあわせて、三輪山の北裾を西流、穴師の南方をすぎて、未は初瀬川に入る巻向川のこと。「穴師川」もおなじ。
1813	ひはら こ 巻向の松原に立てる春霞おぼし思はばなづみ来めやも	巻向嶺にひろがっていた松原をいうのであろう。
2314	ひはら め うれ あゆき 巻向の松原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る	
1092	まきむく ひはら 鳴る神の音のみ聞きし巻向の松原の山を今日見つるかも	三輪山と巻向の弓月が嶽の中間の地とする説がある。「松原」はすでに地名化していたのであろう。
2313	まきむく あしひきの山かも高き巻向の岸の小松にみ雪降り来ぬ	巻向の山のどこかの崖をさしたのもの。
1087	あなしがは まきむく ゆつき たけ くもあ 痛足川波立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲層立てるらし	「まきむく」と同じ。
3126	まきむく あなし こ 巻向の痛足の山に雲層つつ雨は降れども濡れつつそ来し	榎井市穴師 東方の山（高さ、415m）で竜王山の南嶺の隆起部をなし、今も穴師山といわれる。
1087	あなしがは まきむく ゆつき たけ くもあ 痛足川波立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲層立てるらし	いま巻向川とよばれる川。
1100	まきむく あなし ゆ 巻向の痛足の川ゆ往く水の絶ゆること無くまたかへり見む	「痛足川」と同じ。
643	よのなか をみな あなせ 世間の女にしあらばわが渡る痛背の河を渡りかねめや	「痛足川」と同じ。
2143	ま しき の 君に恋ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩凌ぎさ男鹿鳴くも	三輪山南麓、初瀬川流域の平野が当てられるが疑問
504	すみさか いへぢ われ 君が家にわが住坂の家道をも言は忘れじ命死なずは	宇陀市鞍原区鞍原の西方西峠の旧道の坂であろう。宇陀から初瀬方面への要路に当たる。
427	ももた や そくまきか たひげ 百足らず八十隅坂に手向せば過ぎにし人にけだし違はむかも	幾まがりも曲がり角の多い坂道の意、なお、「八十」までを序として、「スミサカ」とよみ、宇陀の墨坂とする説がある。
1609	うだ ま 宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿も妻に恋ふらくわれには益さじ	宇陀市大宇陀区を中心に宇陀市標原区にかけての一带の山野をさすもので、狩猟たる安騎野と同一地であろう。
191	はるふゆま いてま うだ おほの けころをも春冬敷けて華しし宇陀の大野は思ほえむかも	「宇陀の野」と同じ。
1376	やまとうだ まはに につ わ こ 儀の宇陀の真赤土のさ丹着かばそこもか人の言を言なさむ	宇陀の地が古来赤土を産出していたのによる。宇陀市標原区に赤壇の地名があり、宇陀市菟田野区大沢には現在水銀鉱山がある。
45	かろのみこ あきの やすみ 輕皇子の安騎の野に宿りましし時、神本朝臣人麿の作る歌 ししわが大王照らす日の皇子神ながら神さびせすと太敷かず京を置きて隠口も初瀬の山は真木 立つ荒山道を石が根禁樹おしなべ坂鳥の朝越えまして玉かざる夕さりくればみ雪降る安騎の大野 に旗薄小竹をおしなべ草枕旅宿りせす古思ひて	宇陀市大宇陀区あたりの山野、市街の西方の迫間の阿紀神社があり、宇太阿貴宮の址を伝えているが、この付近から宇陀市大宇陀区一帯、宇陀川の流域に沿って宇陀市標原区の山野にかけての山野であろう。
46	やど いにしへ 阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに	
2834	やまとむらふ もとしげ や 儀の重厘の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ	宇陀市室生区の地であろう。

凡例

○長歌については本文を省略し、地名（地名を含むものも含む）のみとした

○題詞、左注についても対象とした

引用文献

○日本古典文学大系「萬葉集」

高木市之助

五味 智英 校注

大野 晋

○万葉全地名の解説 犬養 孝 著

頭書き

万葉集は当圏域で詠まれた「こもよ みこもち・・・」の求婚歌で始まりますし、当圏域は古代国家の中心舞台であったことから、200以上の歌が残っている万葉集のふるさとでもあります。

名歌も沢山残っていますが、今回は地名等が詠まれた歌を、地名等についての説も併せて紹介しましたので、これを参考に一度現地に立って鑑賞してください。